

『窓の向こう～ドクトル・コルチャックの生涯』

アンナ・チェルヴィンスカ-リデル(著)、田村和子(訳)

石風社
2021.5

我が国にはコルチャックの伝記としては、近藤夫妻による伝記(『決定版 コルチャック先生』)や米国のリフトン(『子どもたちの王様～コルチャック物語』)、独のモニカ・ペルツ(『コルチャック～私だけ助かるわけにはいかない!』)によるものがあるが、ポーランドでの研究蓄積を前提にした伝記は本書がはじめてである。

本書は主として子どもを含む若者向けの本ではあるが、コルチャックの全生涯をコンパクトに示す優れた作品である。映画『コルチャック先生』(1990 アンジェイ・ワイダ監督)をご覧の方は、そこでの映像を思い起こしながら一挙に読み進めることになる。

開けられた窓 から

“窓の向こう”という本書の書名は、子ども向けの偉人伝を手掛けてきた著者が、コルチャックの作品『開けられた窓』からヒントを得たものである。

現在も残っている孤児院の建物は、第二次大戦中屋根裏部屋のあった5階部分がナチスドイツの空爆によって吹き飛んでしまっただけで今はないが、その部分にコルチャックの書斎があった。とはいえず子どもたちも出入り自由で、彼の不在のときに子どもたちが好んで入ったようだ。本書にも、その書斎に入った子どもたちが彼の設ける障害物を排除して窓辺に向かった様子が描かれている。コルチャックの原典から引用する。



「私には楽しいのだ、子ども達が誘惑する物をいかに巧みに回避するのかあるいはいかに妨害物を一掃するのか、それらを知るのが楽しい。開けられた窓は勝利する。例え風があっても、雨でも、寒くても。トロピズム(注 ウィルスの向性、植物屈性)は藻に対して至るところに密集させ、化学的な親和力のちょうど結晶点のように、上と下に向かってグループを形成することを命じ、ジャガイモの莖に対しては穴倉の壁にそって格子窓をめざして這い回るよう命ずる。その同じ自然の法則は、人々の禁止に反して、囚人を窓へと向かわせる。広がりを目にするためだ。子どもには、運動と空気と光が必要であると、私はこのことに同意する。しかし、まだ必要なものがある。広がり、自由の感性だ。これは開けられた窓だ」(塚本訳“開けられた窓”1926)

1942年、コルチャックと孤児院の子どもたちはゲッソーの中の「囚人」であったが、本書は、過酷な

状況が迫る中、タゴールの戯曲「郵便局」の主人公で重い病の少年の死の受容と病床の「窓の向こう」にある子どもの解放・自由を重ねて終わっている。

日本の子どもたちの思い

窓の向こうにあるものへの“子ども”の思いとホロコーストの現実の落差を私は感じてしまう。映画『コルチャック先生』では最終シーンで子どもたちが一時的にせよ解放されるかのようなシーンが挿入されている。これにも同じような問いを発したくなる。

中学生や高校生はここをどのように見、読みとるのだろうか。日本の子どもたちはどのように読むのか。大学でコルチャックの話をするがほとんど彼のことを知るものはない。本書の出版を子どもたちとの対話を可能にするものとして心から歓迎したい。

訳者田村和子さんは、よく知られているように、ポーランドの青少年向けの文学や絵本などの翻訳紹介の他、コルチャックに関してのみならずホロコーストの歴史をクラクフ中心に研究されており、コルチャックという人物や思想を紹介する本書の訳者としてはこの人をおいて他にないと感じながら本書を熟読しました。

(塚本智宏、札幌国際大特任教授、本会会員)

コルチャック先生のヒューマニズムの原点

感想文を書くなら、真っ白なキャンバスに描くこと、題材は初心であること——知っていることで感動が遮られるのをおそれます。ましてやコルチャック先生に関する、児童向けの本ですから。

映画『コルチャック先生』のハイライトシーン——幼子を抱きかかえるコルチャック先生を先頭に子ども達が強制収容所へ向かう聖者のような大行進では、頭の中にはリアルな音楽が轟きます。それは成人して以来「アウシュビッツ」というワードに過剰に反応する私だからです。

「子どもの権利条約」という概念の礎となった、子ども法廷による自治の思想。ヘーニョと呼ばれた子ども時代、世界改造計画という哲(さと)りに似た知覚を持ったコルチャック先生の分け隔てない資質。

この時代の地殻変動や歪みを背景に、コルチャック先生のヒューマニズムの原点を描いた伝記を何も知らない真っ白な子どもの心で読み、自己変革の感動的出会いとし、ぜひ感性の柔らかな発達

期にドクトル・コルチャックと巡り合い人格の柱にしてほしいと思います。

コルチャック先生のフィロソフィーの核心は、子ども観、子ども像をどう捉えるかにあるでしょう。アジア、日本、北海道、市町村から学校、学級、家庭までさまざまな関わりの中で、子どもや弱者がいかに幸福に生き、家庭、地域の宝として守られるかという課題には、人の心やいのちのやり取りの砦になる覚悟が問われます。「子どもの権利条約」に反映されたコルチャック先生の生き様が悲運の国ポーランドから生まれた意味を反芻し、コルチャック先生の物語を人類の希望の物語として受け継ぎたいものです。



幸せか不幸か、あるいは今日の関心事でいえば、陽性か陰性か、そんな選別の先っ端(ぼ)で未来を決めてなるものかと、改めて思います。人類の愚かさばかりが私達を覆ってしまうと、結局、生命体誕生の地球の胎動期にまで還ることになるのかもしれない。歴史の因果は連綿とつながり、人智では計れない淘汰という神の領域となるのでしょうか。そこに登場すべき人物は、選ばれし申し子のように、

数奇な運命も顧みない愛の人でしょうか。

空に海に境界を隔てない鳥や魚に倣い、大地に白線を引かない時代・世界が(私の苦手な)ネット支配の先に立ち現れ、人類の価値基準が桁違いに変革されるとき、縄文人・先住民族の言い伝えによる人類存亡の危機の壮大な叙事詩をもコルチャック先生は先見していたのだとしたら、強制収容所での抹殺も恐怖ではなかったのかもしれないと、何か超越論的な救いにすがりたくもなります。

祈らぬ者の祈祷書 から

最後に、本作からコルチャック先生の「神と差し向かいで～祈らぬ者の祈祷書」の一節を引きます。

「わたしは背筋を伸ばして要求します。自己の利益のためではないのですから。

子どもには幸運を与えて下さい。努力する子どもには援助の手を、困難にある子どもには恵みを与えて下さい。安易な道を通って子どもを導くのではなく、美しい道を通って子どもを導いて下さい。

わたしの宝物である悲哀と労働を手付け金として子どもを導いて下さい。それがわたしの願いです。」

(熊谷敬子、本会会員)

『アレクシエーヴィチとの対話～「小さき人々」の声を求めて』 スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ；鎌倉英也；徐京植(著)；沼野恭子(著訳)

岩波書店
2021.6

本書はアレクシエーヴィチのノーベル賞受賞講演、日本を訪れた作家の福島原発事故の取材(2016)、徐京植氏との二度の対談(2000/2016)、東京外国語大学でのレクチャーなど、様々な題材から構成されているが、その核となっているのは2000年に放映されたNHKスペシャル『ロシア：小さき人々の記録』だ。著者のひとりである鎌倉英也が作成した20年近く前の番組だが、書籍化にあたって、長いスパンから作家の創作の軌跡を振り返るようなかたちで再構成されており、新しく多くのことに気づかされる。「亡命」を余儀なくされたアレクシエーヴィチが、滞在先のドイツから序言を寄せていることから明らかなように、昨年の大統領選挙と抗議活動以降のベラルーシの緊迫した政治情勢もまた視野に入っている。

鎌倉は『戦争は女の顔をしていない』(1985)から『チェルノブイリの祈り』(1997)にいたる作品に登場する人物のその後を、アレクシエーヴィチ本人とともにインタビューすることで優れたドキュメンタリーを作り上げた。

本書を読むとこの番組での取材活動そのものが

アレクシエーヴィチのその後の創作の源泉にもなっていたことがわかる。とりわけチメリヤン・ジナトフは、自殺の問題を扱った『死に魅入られた人々』(1993)の末尾で引用される新聞記事に名前が出てくるだけだったが、最新作『セカンドハンドの時代』(2013)では重要な登場人物の一人になっている。ジナトフはバシキリア(現バシコルトスタン)生まれのタタール人で、第二次世界大戦の激戦地であるベラルーシのブレスト要塞で戦ってドイツ軍の捕虜となり、戦後は第二シベリア鉄道の建設事業に参加するが、ソ連解体後の状況を嘆いて抗議の意味をこめて自殺した。本書の記述によれば、アレクシエーヴィチはNHKスペシャルの取材で初めてジナトフの遺族に会ったことになる。番組の映像も今回の書籍も作家の創作プロセスを知るための貴重な一次資料を提供しているのだ。

生成するテキスト

アレクシエーヴィチの作品はそもそも完結することのないテク



ストといえる。作品がいったん出来上がって刊行された後でも、インタビューは繰り返され、言葉が書き加えられ、修正された新しい顔を見せていく。『戦争は女の顔をしていない』をめぐる検閲官との対話や、『アフガン帰還兵の証言』が原因で戦死者の遺族から訴えられたアレクシエーヴィチの裁判の記録さえ、生成するテキストの中に取り込まれていくのだ。

日本語で読める文献は充実している。2021年には本書の他にも、松本妙子による新訳『完全版：チェルノブイリの祈り』が出版された。2013年版を

もとにして、初訳よりも大幅に内容が加筆されている。沼野恭子によるNHK「100分de名著」も『戦争は女の顔をしていない』を取り上げた。

アレクシエーヴィチの作品はすでに様々な言語で映画や戯曲に翻案されているが、小梅けいと作画、速水螺旋人監修のマンガ版『戦争は女の顔をしていない』(2019～)の展開も興味深い。翻訳や翻案、視覚化・映像化を通して、アレクシエーヴィチの生み出した世界は広がり続けている。

(越野剛、慶應義塾大学准教授、本会会員)

詩集『タイチの場合』

加藤多一(著)

共育舎(011-780-7113)

2021.3

「詩の言葉」への痛快な一撃

確か小樽詩話会の飲み会であったと思う。加藤多一さんとお話をしていたら「詩の言葉がいちばん素晴らしいのだ」的なことを発言していたことがある。

私自身は自分が「表現者である」ことは自覚している。そしてそれは詩というものらしい。そうであって、例えばお前の書いているものは詩ではないといわれても、あまり気にならない。「詩とは何か」といった定義に関心が無いのだ。

しかし絵本作家として名を成している方が、詩の言葉は別物であると言うことに興味が沸いた。ただその後改めましてお話をする機会もなく、今やコロナ禍で会うことすら難しい。そんななかで加藤さんの詩集に出会う機会を戴いたわけである。

作品「勝内川を歩く」。多喜二をメインに据えつつ、発泡酒にカモメ、スニーカー、温根橋、拓銀と山頭火など、実に数メートルごとの思い出が並ぶ。えらく具体的で説明的でさえありエッセイにも思えるが、一步ごとの余韻に浸る。

作品「ニセアカシア」。どうしてニセなどという名を付けるのかと筆者は憤慨する。本物と偽物の二択にする分かりやすさは、しかしそのとき彼である(木)の本質の名前を考えない愚かしさにいきり立つ。この思考性。問題意識を自分の内側に落とし込み、自分の言葉で繰り出してくる。ただそれは割と主観的な意見の大いなる主張であり、私にはシュプレヒコールに聞こえる。

次いで言葉とか、詩をテーマにしているものを選ぶ。作品「字を書くひと」では、目の前にいるなら話すのだ。しかし携帯電話などない遙かな以前、女は文盲で当然の時代、手紙とは、それは残るものである。読めても書けないという人もいる。現在でも

銀行が嫌いで、さあ名前を書けと言われて躊躇する八十、九十代の方がいるという。書き記すという行為は声にすることとは比較にならないのだ。

作品「文学の光と闇と…」。島崎藤村が東條英機の文案の相談に乗っていたと怒りを露わにするが、作家連中が聖人君子であると私は思わない。むしろ、祭り上げている理由を見極めた方が良い気がする。そうであって筆者にとっての、憧れの文人であり、なおかつ残るべき文字のことであるから簡単には許しそうにはない。

そして作品「信じきったタイチ君」であるが、戦後の新制中学1年生であり新憲法制定の第九条を必死に書き写した世代。あのかの教え“主権在民”は今どこにあるのかと、信じきったタイチ君は戸惑う。痛恨のミスであろう、その“主権在民”は、理念であり単なるコトバでしかない。つまり最初から絵に描いた餅であるのだ。それは実行することでしか形に出来ないものだ。85歳のやせた胸骨をもう一度叩くのみであろう。

こうしたタイチ詩集であるが、これは詩集であろうかとちょっと考えてみる。しかしムラタ的考えでは、これはどうでも良い範疇の疑問である。ちょっと変わっているかなとの印象はあるというところだ。やはり、詩を書いているというその内部にしながら、詩が何かを考えても答えなど出せる気がしない。

そうであって、鳥よりも遙か上空を行く想像する者によって、なによりタイトルが、主張している。『タイチの場合』の詩とは、そして詩集とは、かくなるものである・と実に明確に断言していると読んでしまった。まことに痛快な一撃から始まっているのだ。あはははははは。(村田譲、北海道詩人協会)

